

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2007年の部				
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ				
作者		岩崎純一				
通釈・語釈		園井長光、岩崎純一(自釈)				
作者サイト		<a href="http://iwasakijunichi.net/">http://iwasakijunichi.net/</a>				
和歌ページトップ		<a href="http://iwasakijunichi.net/waka/">http://iwasakijunichi.net/waka/</a>				
詠進年月日	題	2007年の歌会・歌合	通釈	語釈	他歌人欄	
主催: 岩崎純一	歌数:90首 歌人数:7名 自歌数:14	『武蔵野懐紙』(むさしのくわいし)			評	派生歌など
2007/1/1 出題 2007/3/31 判	『熊野懐紙』(1196~1221)にならい詠むこととした。歌の舞台となる地域は熊野から武蔵野へと変更し、武蔵野とその周辺を詠むこととした。 原主催・出題者:後鳥羽院 出題者:岩崎純一 衆議判					
2007/1/14	遠山落葉	峯の色は冬の梢になり果てて遠目(とほめ)さびしきもみぢ葉のあ	山の峯の木々の梢は枯れ、遠目に見る様子も冬になりきって、今は秋の紅葉を思い出す寂しさである。			
2007/1/14	海辺晩望	夕風の渚の果てにほの見えて波にうつれる漁り火の影	夕風の渚の沖のほうに少し見え、波にも映っている、漁船のかがり火の光。	◇本歌取「漁り火の昔の光ほの見えて蘆屋の里に飛ぶ蛍かな」(良経『新古今』)		
2007/1/25	山河水鳥	多摩川やひとり羽振(はぶ)きし白玉の散れる尾増してさわぐ群鳥(むらとり)	多摩川で鳥が一羽のみ羽ばたいて水を散らしていたが、やがて何羽も集まって騒ぎ、水を散らしている鳥たちであった。	◇歌枕「多摩川(玉川)」		
2007/1/25	旅宿埋火	武蔵野の原を夢見し草枕うつつも仮庵(かりほ)寒き埋み火	武蔵野の原を夢見て旅する草枕。目覚めてみれば、現実も、夢に見た武蔵野の寂しさに似た、寒い仮小屋の中の私の前にある埋み火であった。			
2007/2/3	山路眺望	高尾より眺むる野辺を風なでて伊勢や相模の黒髪原	高尾山から眺める武蔵野の原を、伊勢原や相模原のほうまで吹く様は、伊勢や相模のような美しい女の黒髪をなでる様である。	◇掛詞「伊勢原×伊勢」「相模原×相模」 ◇縁語「なづ、黒髪」		
2007/2/3	暮里神楽	日野暮れてきねが袖振る木綿(ゆふ)ごとに風立川の里のをち	日は暮れて、日野や立川のあたりの里では、巫女が木綿四手を持ち袖を振って祈るごとに、風が立って冬の早朝もいつも通りに仏道修行のために入ってゆく谷では、夜が明けると共に見え始める雪の上に、北風が吹いている。	◇掛詞「勤めて×つとめて(早朝)」		
2007/2/16	古谿冬朝	冬もまた道をつとめて入る谷は明けそむる雪に北風ぞ吹く				
2007/2/16	寒夜待春	おぼろなる影は今宵の心かな我が待つ春の月ならずして	霞んでいる姿とは、私が待ち遠しく思う春の朧月ではなくて、冬の今宵の私の心なのだ。			
2007/2/25	行路氷	秋の夜の露を集めて朝氷こひぢのあとにはや結ぶかな	秋の夜道は、露のせいで泥状であったが、冬の今、朝には氷が自ら秋の夜の露を集めてきたかのように結			
2007/2/25	暮炭竈	雲思ひ焼く炭竈の心かな分かず峯までこむる煙は	雲に思いを焦がす炭竈の心だろうよ。散り散りにならず、辺り一面に山の峯のほうまで立ち込めてゆく煙	◇掛詞「焼く(思い焦がれる)×焼く(炭竈)」		
2007/3/10	深山紅葉	深山木(みやまぎ)や高尾の嵐もみぢ葉の色を野辺まで吹き下る	高尾の深い山の木々に嵐が吹き、紅葉した葉を武蔵野の原まで吹き下ろしてきた。			
2007/3/10	海辺冬月	波寄せて返りは果てぬ薄なごり浜を鏡と冬の月影	波が打ち寄せるものの、沖へ返りきらずに砂浜に残る波の薄なごり。砂浜を鏡として、冬の月影が映る。	◇掛詞「名残×余波」		
2007/3/22	峯月照松	山際に月の出づるを松が枝や千歳のみどり色ぞうつれる	山の後ろから空に月が出てくるのを待っていると、山の松の千歳緑の色を照らしつつ、月が出たことよ。	◇掛詞「待つ×松」		

2007/3/22	浜月似雪	夏雲に隠るる夜月もろともに消ゆるまぼろし浜の白雪	夏雲に隠れゆく夜月と一緒に浜から消えゆく白雪と見たのは、幻の白雪、浜に映っていた月の純白色なのであった。			
主催: 岩崎純一	歌数:16首 歌人数:4名 自歌数:5首	『寄花色恋歌合』(はなのいろによするこひうたあはせ)			評	派生歌など
2007/11/4 即詠	花の色に寄せて恋を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 衆議判					
2007/11/4	寄赤花恋	叶はずはふたたび恋を岩つつじ包みて言はじ色に出でても	叶わないのなら、再び恋心を言わないでおきましょう。包み隠して。岩つつじのように、赤い顔色に心が出たとしても、少なくとも言葉では。	◇掛詞 「岩(つつ)じ×言はじ」		
2007/11/4	寄青花恋	摺り染めし斑(まだら)の衣あせ果ててありし夜頃も月草の花	月草の花を摺り込んで染めた斑の美しい着物もあせ果てて、あなたがそばにいたこれまでの毎夜も、月草の花のようにはかなく尽きた。	◇掛詞 「月×尽き」		
2007/11/4	寄白花恋	白露のやまぬ心の山ぢさは月に明るき夜の玉簾	恋心のためにやまず流れ続ける私の涙は、山萵苣(やまちさ)にやまず置き続ける白露と共に月に明るく照らされ、夜の玉簾のようです。	◇枕詞 「白露の一玉」 ◇参照 「山ぢさの白露しげみ」(『万葉』)		
2007/11/4	寄黒花恋	黒髪 of 乱れ降りぬる暗き雨に染み果てたるは合歡木(ねむのき)の花	黒髪のように乱れて降った暗い雨の色に染みきってしまったのは、男女の仲を表すと古歌にも歌われた、合歡の木の花。	◇枕詞 「黒髪の一乱れ」 ◇参照 「昼は咲き夜は恋ひ寝る合歡木の花」「我妹子が、形見の合歡木は」(『万葉』)		
2007/11/4	寄花筐恋	色々にはほふ昔の別れ路よ今はかたみに摘みし恋の芽	四季の草花のように二人の昔の思い出が色々と思い出される、最後の別れ道よ。お互いに恋の芽を摘み取ったように、今は、形見に摘むような草花の芽も見	◇掛詞 「形見に×互に」		